

国際協働型プロジェクトにおける大学生の学びと リーダーシップ形成 ～Marianas Kyushoku Project (MKP) の実践報告～

村田 晋也¹、川脇 慎也²、秦 敬治³

¹愛媛大学教育・学生支援機構、²九州国際大学現代ビジネス学部、³倉敷芸術科学大学

1. はじめに

近年、初等中等教育のみならず高等教育においても、「他者との協働や課題解決型学習などを通じ、深い学習を体験し、自ら思考することを重視する考え方」の重要性が指摘されている（文部科学省 2023）。こうした流れの中で、知識の習得にとどまらず、社会課題の現場に関わる体験的な学び（経験学習：experiential learning）を通じて、主体性・協働性・課題解決力を育成する教育の意義が高まっている。とりわけ、国際的な協働活動は、異文化理解や多様性の尊重を学ぶ場であると同時に、他者との関わりを通じて価値観やリーダーシップを形成する機会として注目される。欧米では体系的な教育プログラムが定着しつつあるが、日本の大学では発展段階にあり、今後はこうした体験的学びの導入が教育実践や学生支援の新たな方向性として期待される。

2. プロジェクトの背景と目的

Marianas Kyushoku Project（以下 MKP）は、北マリアナ諸島サイパン島の学校給食をテーマに、日本の大学生が現地の教育機関や行政、地域住民と連携して取り組む国際協働型教育プロジェクトである。現地の給食は地域経済や食文化の影響を受け、喫食率の低さや食品廃棄といった課題を抱えている。MKP では、食を通じた健康づくりや文化継承を題材に、学生が現地の児童・生徒、教職員、給食提供事業者と協働しながら課題を発見・解決するプロセスを重視している。

本プロジェクトの目的は、こうした活動を通じて学生が多文化環境で他者と協働し、リーダーシップや課題解決力、社会的責任感を育むことである。MKP は国際協働を通じた体験的学びを大学教

育に位置づけ、経験の振り返りと次の行動への接続を促す仕組みにより、学びを一過的体験にとどめず継続的な成長へと発展させる試みである。

3. プロジェクトの歩み

本プロジェクトは、10 年以上にわたり現地機関と連携してリーダーシップ・プログラムを展開してきた教職員が、学生と共に「現地のために何ができるか」を考えたことを契機に、2024 年 3 月に発足した。現地の学校給食が抱える残食率の高さに着目し、その改善を通して学生が課題発見力や協働的リーダーシップを育む実践の場として位置づけられている。

2024 年度には、小・中学校の生徒を対象に質問紙調査や給食時の着席時間の実測、残食量の計測、教員・生徒・給食提供事業者へのヒアリングを実施し、喫食率の低さや残食要因を客観的に明らかにすることを試みた。また、これらの結果を CNMI Public School System（北マリアナ諸島連邦公立学校機構：PSS）および同機構の Child Nutrition Program (CNP) のメンバーに報告し、今後の取り組みについて協議した。

2025 年度には、第 13 回日本食育学会学術大会でこれまでの成果について学生・教員メンバーが共同発表を行い、食育分野の研究者や実践家から多数の示唆に富むアドバイスを得た。また、現地では PSS および CNP のスタッフと継続的に意見交換を行うとともに、CNMI の D. M. Apatang 知事を表敬訪問し、学生が本プロジェクトの概要と意義をプレゼンテーションした。その結果、知事からは本プロジェクトに対する高い評価と、今後の活動への支援の意向が示された。さらに、実業家 Jerry Tan 氏との会談では、MKP の理念への共

感が寄せられ、今後のサポートを惜しまない旨のコメントを得るなど、現地においてMKPの活動は広く好意的に受け止められている。

表1 MKPの主要マイルストーン表

年	月	主な活動内容
2024	3月	大学間連携事業UNGLが主催する研修プログラム「リーダーシップ・チャレンジinサイパン」に参加した学生の有志によりSaipan Kyushoku Project(旧称)が始動。
	5月	愛媛大学国際連携推進機構が主催する <i>Study International Fair</i> で学生がポスター発表。サイパンでの活動予定と課題となる内容を発信。
	10月	▶学生4名が現地に渡航し、CNMI Public School System (PSS)のCOEに向けてプレゼンテーションを実施。プロジェクトの承認と支援を求め、快諾を得る。その様子は現地紙 <i>Marianas Variety</i> で報じられた。 ▶PSS管轄下の4つの小・中学校の生徒を対象とした質問紙調査を実施。生徒たちの食事傾向や嗜好に関するデータを収集した。
2025	3月	▶Dandan Middle Schoolで残飯量調査を実施。プロジェクトメンバーが手作業で食材・メニューごとの残飯量を実測。 ▶前年10月に実施した質問紙調査の結果をもとにPSS及びその管轄にあるChild Nutrition Program(CNP)のチーフや管理栄養士へ報告を実施。今後の取り組みの方向性について意見交換を行い、現地の教育行政との連携基盤の強化に努めた。
	5月	愛媛大学国際連携推進機構が主催する <i>Study International Fair</i> で学生がポスター発表。これまでに実施した調査や今後の取り組みについて学内外に発信した。
	6月	第13回日本食育学会学術大会にて2件のポスター発表を実施。教育・栄養・地域連携の観点から注目を集め、今後の展開に向けて当該分野の有識者から多くの示唆を得た。 <発表タイトル> (1)北マリアナ諸島(サイパン)の小・中学生を対象とした学校給食に関する意識調査 (2)サイパンにおける学校給食の残飯量および生徒の食行動に関する実態調査
	9月	▶北マリアナ諸島連邦知事を表敬訪問し、プロジェクトの概要と今後の企画についてプレゼンテーションの上、サポートを要請。快諾を得た。 ▶PSS・CNPと合同会議を実施。この間の調査で得たデータの分析結果を報告。社会システムへの働きかけの必要性を含め、向後の展開について示唆に富む議論がなされた。 ▶San Vicente Elementary Schoolにて、学校給食時の生徒の着席時間に関する調査を実施。 ▶地元経済界を代表する実業家へプロジェクト概要を共有し、今後の連携と支援を要請。

4. 学生の成長過程に見られた学びの特徴

学生の行動や発言の変化を通して、①主体的行動への転換、②協働的リーダーシップの発揮、③異文化理解と自己変容といった学びの特徴が見られた。初期には指示を待つ傾向があった学生も、活動を重ねる中で自ら課題を見出し、現地との対話を通して自律的行動へと変化していった。メンバー間では「分散型リーダーシップ(distributed leadership)」が観察され、個々が役割を担いながら相互に支え合い、チームとして意思決定を行う姿が確認された。また、給食という身近なテーマを通じて「自分の当たり前は他者にとって当たり前ではない」という気づきを得る学生も多く、異文化理解と自己の価値観の相対化が進んだ。これらの経験は、国際的な協働を通じてリーダーシップを育むうえで重要な基盤となる、多文化感受

性の形成につながったと考えられる。

5. 教育的意義と課題、今後の展望

MKPは地域課題の解決と学生の成長支援を両立させる試みであり、大学教育における国際協働型の学びを探る実践である。学生が社会的課題に主体的に関わり、異文化環境での協働を通じてリーダーシップを培っていく過程では、学内外のネットワークを教育資源として活かしながら、地域との連携を通じて学びを深めていく姿が見られており、こうした実践の中に教育的意義の可能性を見ている。

一方で、活動の継続性や成果の可視化、事前・事後教育の体系化など、教育実践としての体制整備は今後も検討すべき課題である。これまで培ってきたリーダーシップ教育やリフレクションの手法を基盤に、さらなる学びの深化と持続的な発展を図りつつ、現地教育機関との協働を一層強化していくことを目指している。MKPを通して、学生が国際的な課題に主体的に関わり、協働の中で成長していくプロセスを、今後も実践を重ねながら丁寧に探っていきたい。

【謝辞】本プロジェクトの実施にあたり、CNMI PSSやCNPをはじめ、在サイパンの関係各位から多大なご支援を賜りました。深く感謝申し上げます。また、UNGL(西日本学生リーダーズ・スクール)連携校各位のご協力に厚く御礼申し上げます。なお、MKPは「愛媛大学学生海外短期派遣・受入プログラム支援事業」の助成を受けて実施しています。ここに記して謝意を表します。

<参考文献>

- 木村 充・館野 泰一・松井 彩子・中原 淳(2019)
「大学の経験学習型リーダーシップ教育における学生のリーダーシップ行動尺度の開発と信頼性および妥当性の検討」『日本教育工学会論文誌』43(2), 105-115.
- 文部科学省(2023)『第4期教育振興基本計画』(令和5年6月16日閣議決定)文部科学省.